

良基連歌論の方法

——意地を中心として——

金子金治郎

良基連歌論の方法体系に占める「意地」の位置と意義を明らかにしてみたい。

初めに概略の位置を述べておくと、良基の連歌論は、本質論・史論・稽古論・表現論・会席論などにわたるが、意地はその中主として表現論に係っている。その表現論は、いかなる形象をいかに形成するかに課題の中心のあることはいくらまでもないが、会席文芸である連歌の特殊性格は、そこに著しい条件を加える。ちようど能楽が舞台において「花」を実現するところに生命があるように、連歌は会席という共同制作の場において、次々と付合の進行していく現在にあつて、「当座の感」を実現するのになければ意味がない。したがつて、いかなる形象をいかに形成するかは、いかなる場において、いかなる進行ぶりによつて、いかに「当座の感」を実現するかを条件とする。そのような条件下での形象追求が連歌の表現論であつて意地の問題は、そうした条件下における形象追求の方法に係るもの

として提出される。

連歌表現論における形象追求の方法の大意は、歌論以来伝統的になつている心と詞に分ける分析的方法と、連歌に独自の付合の方法とが噛み合い、歌論とはちがつた複雑さを示す。付合の方法からいうと、「付ける」「取り寄る」などの作用そのものや、その作用を媒介する「寄所」「寄合」などや、作用の核心になる「小宛」やなどが重要な視点となる。これに心・詞が噛み合つて、心で付ける、詞で付ける。寄合で付けるなどとなり、その核心として「心の小宛」「詞の小宛」「寄合の小宛」が問われることになる。こうした形象追求の方法の中で、意地の問題は心の系列に係るものとして取り上げられる。

今良基の心・詞の分析を見ると、詞の系列では、在来の詞のほかに「てにをは」や「かかり」が重要な視点となつており、心の系列では、在来の心・風情のほかに、新しく意地の問題が出されている。心の系列内での意地の位置、在来の心や風情との相互関係は後に検討するとして、概略の位置はこのようなものである。

この小稿では、在来的心や風情について、良基連歌論の中でそれらの担う意義を整理し、相互の関係を検討しながら意地の考察に及

び、意地を中心にして、その意義を明らかにして行きたいと思ふが、その前に意地の一般的な意味や、良基連歌論における用法についての諸家の説を掲げ、この考察の拠所を明らかにしておきたい。

意地の一般的な意味については、広辞苑に「(1)こころ、意思、

氣だて、心根。(2)自分の思ふことを通そうとする心」とある中の(1)の説明がもつとも参考になつた。「意思」いうごとき対象化された心と、「心根」というごとき主体的な心との両面の合わせ掲げられている点が特に参考になつた。この語が仏教用語であり、良基も用いている「心地」の類語であることは、仏教大辞典の「意は第六識。是れ一身を支配する所、又万事を發生する場処なれば地と云。心地と云ふ如し。」の説明によつて知ることが出来る。「意」や「六識」の詮索はしないが、意地が主体的なものであること、「一身を支配し」「万事を發生」せしめる根源的なものであることは、この説明から読み取ることが出来る。

良基連歌論の意地について、久松潜一博士は、「意地も時に心地と言はれるが、人間性ともいふべきであつて」(注1)と指摘された。主体的根源的なものとして、表現主体の人間性にまで廻り下げられたものと思はれる。額原退藏博士は「美に対する感動」(注2)とした。これは意地の文芸的機能——美に対して發動する点を重視したものと思はれる。能勢朝次博士は「連歌を生み出す所の根源となる芸術心」(注3)また「芸術的な意識」(注4)と定義づけている。「芸術的な意識」としたのも、前の「芸術心」と同じく、作品を生み出す根源となる心の意かと解される。「美に対する感動」もそのような芸術心において發動するものと考へれば、額原説との関連もつくようである。ともあれ能勢説の懇切で幅のある解釈は、この

小稿を進める上の指針になつてゐる。

能勢説を継承して良基の意地を詳論されたものに水上甲子三氏の説がある(注5)良基の意地を後世至宝抄などが強調する本意に結びつけ、結局良基の意地とは、

詠まんとする対象に深く修業工夫をめぐらして観入し、その本質を把握して、そのものらしさを詠みだすべき芸術的観照の美的様式であつた。

と結論された。ここで対象の「そのものらしさ」といわれたのが、後世の本意に当ると思はれる。それは山田孝雄博士によつて早く指摘されたものであつて、(注6)「春の日も事によりてみじかき事も御入候へども、いかにも永々しきやうに申習はし候」(至宝抄)とあるごとく、長い伝統の中で読み習わし、類型化されたものである。したがつて意地と本意を結びつけるためには、意地における「対象に」「観入し」「本質を把握」するといった純創造的な契機よりも、意地における伝統的契機こそが指摘されなくてはならない。その点に氏の論の説明不足を感じるが、意地と本意との脈絡を指摘されたのは、示唆される点である。

注1 日本文学評論史・詩歌論篇。一〇七頁。

注2 俳諧精神の探究。二九八頁。

注3 九州問答評釈七。解釈と鑑賞、昭和一九年一月号。

注4 僻連抄評釈四。解釈と鑑賞、昭和二十一年七月号。

注5 良基の「意地」——連歌の本意について——。国語二・三

四合併号、昭和二八年九月。

注6 連歌概説。一一九頁以下。

○用いるテキストは、古典文庫本良基連歌論集一、同二、同三

と、歌論は日本歌学大系本である。(僻連、一ノ六三)のごとく注記するのは、僻連抄に見え、良基連歌論集一の六三頁に出る意。なお僻連抄と連理秘抄の同文の場合は、僻連抄だけ注記する。

2

良基の表現論において、心の系列に属する心・風情・意地が、それぞれどのような役割を負っているか、相互にどう関係しあっているかを明らかにしなければならぬ。心と風情、心と意地が、それぞれ類同と差異をほらみながら共存しているのが良基連歌論の実情であつて、整理は必ずしも容易でないが、可能な範囲内の整理を試みたい。

初めに心・風情について、これはできるだけ簡単に扱つておくことにする。心は大別して二つになる。一つは表現の主体となる心、他の一つは、その心が対象を捉えて生ずる意想で、作品の内容をなす心である。

意想としての心は、心と詞というように並べ用いて、作品の形象を分析的に把握する基本的な方法をなしている。その点歌論史と全く同じであるから、多くいう必要はない。ただこれが付合の問題に結びついて、「和漢ノ時心ヲ取テ詞ヲ捨」(九州、二ノ一八〇)「心ひと付て」(僻連、一ノ七二)「心はそむきたれど」(同、一ノ七二)のごとくになるところに、連歌論における特殊な役割がある。

意想としての心は、形象化の過程で練り上げられ構想される性質のものである。「心をまはす」(僻連、一ノ九四)「心ヲ作入」

(九州、二ノ一九〇)など構想をめぐらす意に用いられる。もちろん歌論と別ではない。かように練り上げられるもの、構想されるもの、したがつてその可能性あるものとして把握されたのがこの種の心——意想としての心であつた。これが詞と噛み合つて、表現論で重要な役割を果たすわけであるが、ここでは触れない。

表現の主体となる心は「心ヲウキ」ト持ナシテ、シヅムベカラズ」(十様、三ノ六)「心をうき」として、しかも案ぜられ候べく候」(下草、三ノ一九)のごときに見る心である。これらは意想・内容としての心ではないし、かといつて表現論と別の心でもない。表現論として大事な役割が負わされて、しかも意想とはちがつたものである。意想のごとく対象と結びついたものではなく、あくまで主体的なものである。表現にあつての心の持ちよう、あるいは態度とでもいうべきものである。

心の持ちようという表現主体の心は、構想のめぐらし方に繋がつて行く。「俊成定家の口伝にも邪路にいらざ、ただしくせよとをしへたり。(中略)しかあらば連歌も心たゞしくつよくすべき也。」(十問、二ノ六三)という時の心は、ほゞ心の持ちよりの心と思われるが、その後で構想のことに及んで、「たとひ風情をめぐらす共人の不審なく正しき様にすべし」と述べている。「風情をめぐらす」は後で触れるように構想をめぐらすことである。主体的な心の持ちようは、構想のめぐらし方に及ぶものであり、結局表現された形象にまで繋がるべきものである。ここに心の持ちよう、あるいは態度というべき主体的な心の占める位置があり、役割がある。態度を正しくすること、あるいは軽快にすること、あるいは沈めることが、表現のありよりの全体に繋がると考えているようである。ただこの

種の心と明らかに認められる用例はきわめて少く、例示した二三だけで、大部分は意想の意の心に用いられている。

心の二つの面をごく簡単に整理してみたが、この二つの面をそれぞれの方で延長したところに、風情と意地が位置するのではないかと考へる。対象と結びついて現われる意想の側にあつて、対象との結びつきより具象化されたところに風情が位置し、心の持ちよう、態度という主体的な側にあつて、それをより根源的に追求したところに意地が位置するのではないか。風情も意地も、それだけでは割切れない部面を残すのであるが、とにかく右のような見取図にしたがつて、まず風情について整理してみよう。

風情が心の側のものであることは、次のような論の展開にも示される。

風情ありて、しかもかかき幽玄なるべし。心につられて詞が損じ詞につられて心が損ずる也。(十問、二〇七二)

花輿論の中に出る文で、風情と「かかき」(詞の統けがら)との対置が、心と詞の対置に言い替へられて行く。つまり心は風情を受け、詞は「かかき」を受けるのであつて、それぞれ同趣のものであると解される。「かかき」が詞の側のものであるように、風情は心の側のものであることができる。しかもこの心は、意想としての心であるから、風情も意想としての心と同趣ということになる。そのことは、次のような用法によつていつそう明らかになる。

詞をとりて風情をめぐらすべし(連理、一ノ一二七)○詞をもみがき、風情をもめぐらし(筑波、三ノ四六)○風情ヲ作入(九州、二ノ一七三)

いづれも、先に意想としての心についてみた用法と同じであつて、やはり構想をめぐらすことと解してよいであらう。しかもそれは歌論にも見られる用法であつて、「タチチオキフシニ、風情ヲメグラサズト云事ナシ」(長明無名抄)のごとく、構想を練る意に用いられている。風情は意想の意の心と同趣のものといつてよからう。

風情が意想の意の心と同趣であるとして、はたして全く同意であるかどうか。すでに風情の語を用いる以上、それだけの特殊性のあつたことは当然予想される。

山にもむかひ、水にも望て、風情をこらすその便あり(僻連、一ノ七七)○さるの水月をとる風情、寄所あり(擊蒙、二ノ二〇)

などを見ると、風情は具象的な対象——この場合は自然——に即したものである。さらに、僻連抄が「寄合も風情もたくさんにこそ」(一ノ八三)と書いてある風情を、僻連秘抄で景物に改め(一ノ八九二)、一幽なる景氣も」(一ノ八四)と書いてある景氣を風情に改め(一ノ一九三)ているなどは、風情が景物、景氣など自然を意味する語と近い意に用いられたかと思わせる例である。ともあれ風情は、具象的な対象に即したもので、具象的な対象に即しながら構想をめぐらされるべきものであつた。それは「山にもむかひ、水にも望て、風情をこらす」とあつたところにも読み取ることができると同じことは歌論の方にもあつて、「風雲草木の時に付てかはる姿を思ひて、風情をもとめよむことは」(八雲御抄卷六)など、同じく自然の対象に即して構想をもとめることが述べられている。かくて風情は意想の意の心と同趣であるが、具象的な対象に即した意想であるところに、その特殊性が求められるかと思ふ。なお

その具象的な対象というのは、用例でわかる範囲では、ほとんど自然である。(注1)

風情の用法には、「当世の連歌の風情を歌にて申べし」(知連、二ノ一二五)「貫之なども家持が風情をこそまなびしか」(十間、二ノ六一)など風体というに近いものが見られる。これは詞の面の「かかり」に見られる現象(別に述べる機会があると思う)と対照的で、「かかり」が詞の続けがら、調べの面から風体を捉える場合のあるように、意想、内容の面から風体を捉えたものであろう。

風情の用例は多く、僻連抄12・擊蒙抄5・(愚問賢註7)筑波問答4・知連抄11・九州問答10・下草4(了俊使用のもの除く)・十間最秘抄15・(近來風体抄4)となつており、それらのすべてがどの程度に意想の具象性を意識していたか、中には単なる意想としての心と同じように使つた場合があるかもしれぬ。しかし心でなく風情を使つた根元には、具象的な対象に即するという特性があつたと思われ、内容となる意想をそのようなものとして把握し、対象と意想の關係をより具体的に示しているところに、風情を用いた方法論上の意義が認められる。

注1 擊蒙抄に「漢句の風情和にとりなす」(二ノ五三)の例がある。この場合はその漢句の意想が、自然を対象とするものかどうか、そこまでは推測のしようがない。

3

風情に対して、心のもう一つの面に属する意地を取り上げる段階に來た。もう一つの面とは、表現主体の側で、その面の心には、心

の持ちよう、態度を意味する用法があつた。その面の心をより根源的に追求するところに意地の位置があるのではないかと、とほすでに掲げた見通しであつた。

意地の用例は、風情に較べて決して多くはない。僻連抄2・知連抄3・(愚問賢註1)九州問答10・下草1・十間最秘抄2のほか、梵燈庵返答書に引く良基の言説中に一例を見るだけである。(注1)なお意地と同じように用いられる心地の語が、僻連抄、連歌十様に各一例あり、これを合わせても多い数とはいえない。しかも用法は単純でなく、表現の主体の側のものの外に、内容・意想に近いものが見える。当面の問題になるのは、もとより前者の意地である。

表現の主体の側の意地は、次のような論の構造から説みとることができ。

先達を捨てとおしふるは、かかり風情なり。意地は同じ物にてあるべきにや。正しくゆがまず幽玄なる事は善阿も誰もかはるべからず。作り様こと葉ざしかはるべき也。(十間、二ノ七〇)これは「善阿か風体古体にて救済一向是を用いず」とあつた前項を受けて、さように先達を捨てたのでは、「連歌の血脉」はどうなるかとの間に対する答になつている。その答は、先達の風体を捨てよといつたが、風体を分析してみると、そこには捨てて変る部分と、変らない部分があると述べたものになつている。その風体分析をみると、かかり・風情や、作り様・こと葉ざしに対して、意地をそれらと区別している。かかり・こと葉ざしのごとき詞の系列から区別するはもちろんであるが、風情(意想)・作り様(この場合は構想と解してよいであらう)のごとき、内容・意想からも区別されて

いる、同じ心の系列で、内容・意想を除いて残るものといへば、結局表現主体の意味の心であるから、意地もその意味のものと解される。そう解した時に、「心根」とした辞書の意味、「一身を支配し」「万事を発生」せしめるものとした仏教用語の意味が生きてくる。意地は、風情のように対象と結びついて生ずる意想とは別で、そういう意想を生ずる表現の主体となる心をいう。

表現の主体となる心は、前に見たように単に「心」と呼ばれる例もあつた。それを特に意地の語で捉えたところには、どれだけの意義があつたらうか。前に挙げた用例でみると、先人の風体を捨てても、変らないで継承されるものが意地であつた。同様のことは、次の例にも語られている。

歌運歌はあながち其師にかゝりの似事もなきにや。定家は俊成のかゝりに似ず。為家は定家のかゝりに似ず。されどもみな天下一の堪能也。意地はゆるぐ事なし。(十問、二ノ六二)

この「かかり」は、風体に近い意味に使われている。そのかかりは、俊成・定家・為家とそれぞれ異なるが、意地は俊成も定家・為家も変らない。かれらいずれも天下一の堪能で、その意地は一貫して変らないという。また下草に、

所詮十体の中はいづれにても候へ、我得たる一体にいりふして
劫入べき糸勿論に候。諸道みな其体各別候。意地は一に候。

(三ノ一七)

ともいう。和歌の十体のごとく、その風体はそれぞれ異なるが、その意地は一つだという。これらの例を通じてみる意地は、人が変わっても変らず、風体が変わっても変らないという、きわめて普遍性に富んだものである。体用の思想を借りるならば、体とか本体とかいう

べきもので、そういう把握をしなければ、適確になしえない性質のものである。

意地を体とするならば、前に挙げた表現主体としての「心」は、いわば用ともいうべき性質のものである。「心ヲウキ〜ト持ナシテ、シズムベカラズ」のごとき、表現に向かつて働き出す心、作用する心といった面が強く感じられる。もつとも「心第一也」の心、「心を正しくつよく」の心になると、強いての区別は無理がある。そこで「心ヲウキ〜」の心であるが、この例に比較してみても、意地の語で把握した心を、より深いところにある、より根源的なものと理解する外はないであらう。

より深い心を探り当て、それによつて、人が変わっても変らず、風体が変わっても変らない普遍性のあるものを把握することは、良基に始まつたことではない。長明無名抄では、「志」によつて同じものを捉えている。当代の歌風を論じた中で、古風の勃興に対して、中古風を奉ずる歌人の間に非難の声の高まつたことを指摘した後「シカレド、マコトニハ心ザシハヒトツナレバ、上手と秀歌トハ、イヅカタニモソムカズ」と結んでいる。「心ザシ」は、流派を越えるというもので、良基が意地によつて論ずるところと、きわめて近い論理を示している。

良基の意地の思想が、無名抄によつたかどうかは、明らかにしようもないことであるが、歌論の伝統の中に先蹤があつたとはいえる。ただそれを意地の語で論じたのは、良基が最初であらうと思ふ。良基はこの意地を「正しくゆがまず幽玄なる」ものだとした。下草の中で「意地は一に候」といつた時、その意地に托していたものも、その文の前に反復論及した幽玄であつた。その幽玄は良基運歌

論を貫く根本理念になつてゐる。また「正しくゆがまず」については、「毛詩にも邪なからむといへり。俊成定家の口伝にも邪路にいらず、たゞしくせよとをしへたり」(十問、二ノ六三)といふごとく、文学精神の根本的規定になつてゐる。良基が意地の語で把握したものは、文学の根本精神である「正しくゆがまず」と、最高の美的理念と信じた「幽玄」とであつた。熊勢博士が「芸術心」「芸術的な意識」と呼んだのも、その点を捉へてのことと思われ、それはまた文学精神と呼んでよいものと思ふ。

幽玄美を理念とする意地は、それを体得してゐるのでなければ、真の表現の主体とはなりえない。その幽玄美を体得し、意地を真の意地とする道は、「幽玄の境に入る」ことであつたと見られる。九州問答の「連歌ノ意地ハ何ト用心仕候ベキヤラン」の条項が、「所詮連歌ト云物ハ、幽玄ノサカヒニ入テノ上ノ事也。俊成卿モ歌ノ道モカ様ニゾ申サレケルト。」(二ノ一八二)となつてゐることは、幽玄の境に入ることと意地との關係を言い当ててゐるようである。幽玄の境に入るべきことは、右の外、筑波問答・下草・近來風体抄などでも説き、九州問答では、「連歌ノサカヒ」に入るべしとも述べてゐる。幽玄の境地に入ることによつて、幽玄美を体得してゐるところに、真の意地が成り立つと考へてよいであらう。ところで、幽玄の境に入ることは、良基自ら述べるように俊成を繼承するものであつた。下草の中にも、「先幽玄のさかひに入べしと俊成卿も申侍」(三ノ二四)と記してゐる。俊成が、「既幽玄之境に入」(住吉社歌合)と述べたところを受けたものであらう。

かくて歌論の伝統を消化しながら、新たに意地の語を用い、それによつて文学精神とでもいふべき、表現主体のより深い精神を把握

しえたといふことができるかと思ふ。この類の意地と認められるものは、秋燈庵返答書に、救済・周阿・良基の合点が、各人各様であるのはなぜかの問に對して、良基の、

句はかはるべき条勿論也。意地は同物。

と答えた例がある。表に現われた句は、各人選択を異にするが、いかなる句をよしとするかの根本精神に變りはないといふものである。また心地では、

彼兩輩(救済・周阿)モ風体ハ各別ナリト云トモ心地ハ皆一也。(十様、三ノ九)

があり、これは前に挙げた意地の用法と全く同じである。なお次の例もほほこの類かと思われる。

連歌を見争四五十万句にも過てや侍らん。然れども其中に意地の連歌十句には過じと覺侍也。(知連、二ノ一〇八)

或座敷の物慾にして叶はず或人に越れて更意地連歌なし。

(同、二ノ一〇八)

根本精神になつた連歌の意であらう。

注1、長短抄に、救済・周阿の仲たがい良基が「ウタテシキ意地」と嘆いたとあるのは、表現論の意地とは別。

4

意地には、もう一つの内容・意想の意味に使われた場合がある。その用法は九州問答にもつとも著しい。

九州問答に、秀逸六体を挙げて、

四八同句ノ風体ニテ意地ヲマハシタル(二ノ一九〇)

とあるごとき、風情とか意想の意の心に近い用法である。この文で「同句ノ風体ニテ」というのは、その前の「三、ハナムトサハトアル句ノ、サシテ心ハナキ」を指している。前で「心ハナキ」といつたのに対し、こちらは「意地ヲマハシタル」と対応させたのであるから、意地は心に対応する。前の心は内容・意想の心と解して当るから、この意地もそれに近いものと考えられる。かつ「意地ヲマハシタル」のまわすは、すでに「心」「風情」のところで見えてきたように、構想をめぐらす意であり、その場合の「心」「風情」は、内容、意想の意であつた。とすれば「意地ヲマハシタル」の意地も、内容・意想と解し「意地ヲマハス」は構想をめぐらすとして当るところである。能勢博士がここを、「深い趣向を凝らしたことをさす」(注1)としたのも、基本的には同じ意味と思われる。この例のごときは、文学精神の意の意地の外に、内容・意想と解すべき意地のあることを示す著しいものである。

大方ハ当時ノ連歌、只同物ヲ百度モ千度モ出シタル計也。更ニ新キ意地モ風情モ沈思スルマデモナキ事也。(二ノ一八〇)

ここで「新キ」と修飾された意地が問題になる。心を新しくすることとは、詠歌大概その他歌論の常識で、良基も「心ヲ新シクスル」(十様、三ノ九)のごとく説くところである。その思想を持ちこんでみると、「新キ意地」は、「新キ心」と言いかえられるところである。そしてその場合の心は、内容・意想の意であるから、この「新キ意地」も、内容・意想の意の意地だと解してよいかと思う。能勢博士はこの意地を、「心地の意。注歌を生み出す素地となる心をいう」(注2)としているが、すでに見たように内容・意想を意味する用例があつたのであるから、ここもその意味に解したらいいか

がであらう。「新キ意地」を新しき意想とするのが、この文の場合穩当のように思われる。

内容・意想の意と認められる意地の存在が明らかだとすれば、他にも同じ用法がありはしないか。九州問答の用例中、前の二例以外の全部を列挙してみよう。

- (1) 連歌ノ意地ハ何ト用心仕候ベキヤラン。答云、先連歌ハ第一心也。真実時ノ風景ヲモ風夜工夫ノ(シテ)、ゲニモト感ヲウカブ様ニアルベキナリ。詞ヲ聞取タル計ニテ意地ガ次ニナル程ニ、当座ノ感がナキ也。意地ハツヨク詞ヤハラカナルベシ。當時ノ人常ニスルハ、意地ハヨハク詞ハツヨシ。又カ、リハツギノ事ニナルニヤ。(二ノ一八一)
 - (2) タ々吉道ヲ知人、タトヘバ風体ハ各別ナリトモ、詞ニ意地ノ違事アルマジキ也。(二ノ一八三)
 - (3) 只寄合計ノ句ニテ意地ノナキ間、稽古ノ人モ初心ノ人モ只同様ニミエタリ。(二ノ一八四)
 - (4) イカナル詞ガ悪クイカナル意地ガ違タルト、コマトトオシヘ侍人ノナキ間、(二ノ一八五)
 - (5) 能々只意地ヲ先トシテヤサシキ詞ヲ好ミ用テ、初心ノ程アラク誹諧ノ体ヲスマジキ也。(二ノ一八五)
- これらの諸例の中、(1)の冒頭の意地(これは今川了俊の質問のことばとして出ている)、(2)の意地は問題であるが、その他の意地は、それがもし心と書かれていたならば、内容・意想の意に解釈して通るところである。(説明は省く)問題となる(1)の冒頭の意地は、これも内容・意想の心に当るようにも思われるが、そういう心のもう一つ根本にある文学精神を意味するようにも解される。そうすれ

ば、この条の論旨は、連歌の根本精神はどうか心得たらよいかという質問に対して、それは第一に心。(精神・態度)だと受け、以下表現の問題を具体的に例示し、最後に(ここには挙げなかつたが)「所詮歌ト云物ハ幽玄ノサカヒニ入テノ上ノ事也。」と結んだと見られる。冒頭の意地を根本精神と解すれば、「幽玄ノサカヒニ入テノ上ノ事也」の結論との照応がよくつくように見える。能勢博士が意地を詳論し、「連歌を生み出す所の根源となる芸術心」としたのも、この条項でのことであるが、冒頭の意地は博士の説に従つてよいように思う。次に(2)の「詞ニ意地ノ違事アルマジ」は、これだけみると詞(形式)と心(内容)が調和するとも解されるが、その為に「風体ハ各別ナリトモ」とあるので、詞に現われたところは各人別々でも、その駆使においては根本精神にそむいていないと解して当るように思われる。以上(1)の冒頭の意地と(2)の意地とは、その用法から見て、文学精神の意に解してよいように思うが、その他は決定しにくいと思う。

九州問答以外で、これまで扱っていない用例は次のようである。
(6) 心を第一とすべし。こつのある人は意地によりて句がらの面白也。(僻蓮、一ノ六八)

(7) 先の秋の夕ぐれは、(注。「さびしかりけり秋の夕ぐれ」を指す)真実の意地も余情もあらはれて第一の難句にてあり。
(同、一ノ八五)

(7) 近日人ノ吉体と思は、大略周阿が意地を学也。(知蓮、二ノ一〇九)

この外、心地では「口かろくしなして心地を洗べからず」(僻蓮、一ノ六七)があり、歌論の意地に「まづつわの地歌の意地を申し侍

る也」(愚問賢註)がある。まず(8)の「周阿が意地」は、風情・風体として当るところ。(7)も風情で通る。(6)は、あるいは能勢博士の芸術心とする説が当るかも知れない。「心地を洗むべからず」の心地は、心の持ちよう、態度の意の心に同じで、芸術心とか文学精神とかいふものではない。

意地の用例全体を掲げ、一応の見解を略記してみた。判定しにくい用法が多く、誤解は多々あると思うが、明らかに内容・意想と見られる意地の存する以上、その面から検討するのは当然の処置と思ひ、あえて私見を提示して、識者の判断の資に供した。とにかく意地には、芸術心あるいは文学精神といふべきものと、内容・意想と認めるべきものがある。その後者は、従来の用語でいえば、心・風情としても通用するものである。それを特に意地と呼んだのは、そこに深い精神と結びついた意想——作者の文学精神のにじみ出るような意想を認めたためかもしれない。同じ意想でも風情は、より具体的な対象、特に自然と結びつくところに特色があつたが、それに対して、意地によつて捉えた意想は、作者の内面に触れ、より心情的であるところに特色があつた、といえるかもしれない。

注1 九州問答評釈一二。解釈と鑑賞、昭和二〇・一二月。

注2 同六。同、昭和一九年一〇月号

5

表現論における心の系列について、これまでのところをまとめる
と次のようになる。

表現主体、(心と呼ぶ場合がある)の根本精神——芸術心とか文

学精神とかいふべきもの——を仏教語を借りて意地とか心地とか呼ぶ。これが物に感れ事に感じて、対象と結びつくとき、内容となるべき意想（心と呼ぶ場合がある）が生まれる。それを風情と呼ぶ。また意地と呼ぶ場合もある。風情は具体的な対象——特に自然——に即した意想であるところに特色がある。この意想は、練られて作品の構想をなし、これが詞の系列と結びついて作品の形象を成す。大体以上のごとき關係と位置を持つのが、表現論における心の系列である。なお作品の形象は、普通に風体と呼ばれる。時に風情が風体の代りに用いられることもある。あたかも、詞の系列の「かかり」が、時に風体と同じ意に用いられるように。

芸術心とか文学精神とかいふべき意地は、表現主体の根本精神をきわめて明確な形で把握したところに、方法論上の意義が認められる。しかし意地を提出した意義は、歴史的な認識において、著しく發揮されていた。意地がもつとも明確な概念をもつて使用されたのは、良基最後の論語十問最秘抄であつたが、いずれも歴史的認識に係るものであつた。俊成・定家・為家を一貫する意地を説くもの、善阿の血脈を意地によつて説明するものなど、みなそうであつた。詞・かゝり、また風情などは変化するが、意地は変化しない血脈として継承されるというのが、意地による歴史的認識であつて、その説明はきわめて鮮かであつた。

意地は、当代作家を並べて、各人各様のちがいを持ちながら、なお共通の基盤に立つことを説明するときにも、見事な役割を果している。救済・周阿・良基の合点が、合点する句はちがいがながら、意地は同じだと説くごとき、救済・周阿の風体は異なりつゝも、その意地は同一だと説くごとき。この種の認識は単に事実を説明するた

めのものではなく、当代連歌の基本的な在り方を提示するところに意義があつたと思われる。それは連歌の進むべき方向を示すことになるが、会席に即していえば、共同制作の場に理念的な統一を保つことにもなつたと思われる。

歴史において継承するものや、今日において基本となるものや、さらに連歌の場の統一原理となるものを、良基は意地によつて把握した。それはまことに見事であつたといえる。だが意地は変らなぬものだとするところには、それに伴う危険がある。良基が変らぬものとする意地は、「正しくゆがまず幽玄」なるものであつた。良基の美的理念を云々するのは、ここでの問題ではないが、幽玄美の主張は生涯を通じて少しも変らない。「幽玄こそ本意に候」（下草、三ノ一六）と言ひ續けて動かかなかつたのが良基である。かく変らない理念を、もつとも根源的な意味を持つ意地の語で捉えたことは良基の方法を鮮かなものにした理由であらうが、同時に固定化させるものでもあつたらう。意地が後世の本意に繋がるという場合、意地の固定化が本意の類型化に繋がる面があり、それが両者を結ぶ大きな契機になつてゐることは見のがせない。

— 広島大学教授 —